

文學上に於ける現時の國家主義：論説

著者	楮村學人
雑誌名	龍南會雜誌
巻	39
ページ	8 - 16
発行年	1895-10-16
その他の言語のタイトル	文学上に於ける現時の国家主義：論説
URL	http://hdl.handle.net/2298/4629

知其白、守其黑、爲天下式、爲天下式、常德不忒、復歸于無極、知其榮、守其辱、爲天下谷、爲天下谷、常德乃足、復歸于樸。決職通韻

これ一韻到底のもの、二十八章にあり

天得一以清、地得一以寧、神得一以靈、谷得一以盈、萬物得一以生、侯王得一以爲天下正。庚

天無以清、將恐裂、地無以寧、將恐發、神無以靈、將恐歇、谷無以盈、將恐竭、萬物無以生、將恐滅、侯王無以正而貴高、將恐蹙。月曆通韻

語法韻法共に一正一反、三十九章に於て之を見る、前に平韻を用ひ字々平和、後に反韻を用ひ字々仄險、

上德不德、是以有德、下德不失德、是以無德。職

此れ一字韻到底のもの、三十八章の首にあり

知不知上、不知知病、夫唯病病、是以不病、聖人不病、以其病病、是以不病。敬

此れ亦一字韻到底のもの、七十一章の全文となす、全文二十八字中に病字を用うるもの八、重複して姿を取る「なせばなる、なさねばならぬ、なるものを、ならぬはれのが、なさぬなりけり」と同調、作者巧を弄ぶ處こゝに至りて掩ふべからず。
(未完)

文學上に於ける現時の國家主義

楳村學人

理想を踏臺とするは文學なり。現實を基礎とするは國家なり。文學は社會に生れて、社會に超越し。國

家は社會に生じて、社會と平行せざる可らず。天地萬有は文學に備へられたる棲家にして、一國一家は國家の世界とする處なり。文學は宇宙萬物を友とし、國家は宇宙の一局部を仲間とする者なり。文學の眼光や、水平線上數千尺の頂より瞻望し、國家の規線や、地平線に追從す。兩者の根本的差異を有するや、此の如き。然り而して、此兩極端を合せて是を一にし、更に彼を此に入れんとする者あらば、誰か、その不合理、不自然の計畫に呆然一驚を喫せざるものあらんや。現時、國家主義を唱導して、文學を利用せんとする者、豈に夫れ此類に非らずや。

國家主義とは何ぞや。現實を踏臺とせる國家の觀念に伴ふ觀念なり。國家は、現實的、社會的にして、一國一家の中に立ち、眼光狭小、廣量狹隘、國家を擬人的にし且つ文學の範圍及眼光に比して是を云ふなるか如く、國家主義の根本は到底現實を基礎としたるに外ならんや。國家主義に二種あり。個人主義に對する國家主義と、世界主義に對する國家主義と即ち是なり。歐洲第十八世紀の頃、ルソー等の個人主義最も勢を逞ふし、其弊害に反動えて起れると、前者の國家主義とし、四海同胞萬國我友とて之を親厚にし、博愛衆に及ぼす世界主義に反對え、排外自主、主我的精神を養成せんとするを職とするは、後者の國家主義なり。現時我國普通に國家主義を唱ふる者は、蓋後者の類にして、國家主義の張本者、獨乙國の眞隨を摸せりとて、實は、狹量なる保守的反動の大勢を弄して、以て、泰西國家主義の假面を被れる輩なり。余輩は敢て茲に、國家主義と個人主義との可否を論せんとする者にあらず。蓋是自ら題外に屬すればなり。亦余輩の是非する限りにもあらざるべし。

回顧想像するに、往古數千載の昔、游牧の民次第に集合して、部落となり、次に社會を成し、やがて、國家を作り、言語、人種、宗教、互に相等々、以て一致結合えて、一國始めて特立し、自他の諸國民と相

對待するや、必ず茲に、全國民に貫通透徹、普通適滿の精神の存するを認めずんばあらず。波斯には波斯獨特の氣象存じ、猶太、埃及には亦各々特異の精神普滿したるにはあらずや。この精神や、星移物更り、星霜次第に積むに従ひ、漸く、膨脹發育し、漸く大、漸く熾、外敵に遭ひ、時難に遇ひ、千鍛萬煉、連結凝固となり、精神旺盛、向ふ所發しては、遠征となり、移住殖民となり、起業となり、冒險となる。一國於是泰然動かず、活動敏銳、一舉手、一投足も、皆な有機体の如く、全國民の運動ならざるなきに至る。蓋國民を連結するに最も勢力を有するは、人種の關係、言語の一致、及宗教の同一なるとに歸せざる可らず。希臘始め小國對立し、互に怨恨反目したりしも、一端波斯の大軍飛鳥の如く襲來するや、彼等の眼中時に唯希臘國民あるを知りて、區々たる自國あるを知らず。咄嗟、軍隊成り、水師編成せられ、連合協力の結果は、遂にサラムス灣の一戰に倒海の勢を挽回したるか如き、前三者の力に由るものにして、國民的精神の勃興したるを回想すべし。或は普佛戰爭に於ける獨乙の運動の如き、エリサベス朝に「アルマダ」艦隊を燒盡したる英國民の如き、是を近くは我日本帝國か、全國民靡然として、東西呼應え、頑迷無禮の清國を粉碎にしたるが如き、國民協同一致の國民的精神の勃興に由らずんばあらず。國家主義の據て以て、金城鐵壁とする所の者は、蓋この精神に外ならず。

惟ふに、國民的精神は、相對的觀念なり。故に國家主義も亦相對的觀念ならざるを得ず。「非我」あり故に「我」存す。客觀的事物あり故に、主觀的の觀念生ず。他國あり、始めて、自國の觀念生ず、されば、國民を結合一致せんとせば、國家主義最も力あるものなるべし。それ、國家主義は近世歐洲に發達來れる觀念に於て、往古希臘、波斯を倒え、羅馬天下を一統したるか如きは、未だ、必ずしも、國家主義の大施を望みて、風靡したるにはあらず。然るに、堂々たる羅馬帝國、忽ち、北狄蠻人の馬蹄に蹂躪顛覆

せらるゝや、歐洲大蓋下の國民桎梏を脱離したるが如く、擾々紛々として、互に旗色を競ひ、オオ人あり。アツチヲあり。日耳曼人、フランク人、ノルマン人、サキソン人等盡く中原の鹿を争ひ、劍戟撃ち、干戈交り、「國民」てふ精神次第に發達せ、之に加ふるに、十八世紀の末葉よりしては、個人主義の反動を捲起せ、第十九世紀に至り、普佛隙を生じ、兩國干戈に訴ふるに及びて、國民的精神の發達蓋其絶頂に達せりと云ふべし。國家主義は蓋、この大勢に依りて醸生せ、この國民的精神を基とせ、愈々之を進歩發達せしめ、益々國民の敵愾心を鼓舞振作せんとする者なり。我國現時の國家主義が國民の敵愾心を鼓舞せんとするは、蓋、その眞正の國家主義の一部分を解する者にして、夫の齒は蚤あたりとや云ふべし。

げにや、國家主義は國民の精神を一統し、結合し、鼓舞せ、激勵鞭撻し、自他の國民と相對待し、且つ、畏怖戰栗せしむるに、此上ならぬ好利器と稱嘆せざる可らず。思ふに、理想は常に現實と伴ふ能はず。世界は一時にきて、トマス・ムーアの屋氣樓中に描出したる、理想的圓滿の世界と成ること能はず。一人一個の交際にすら圓滑ならず。歌人は樂みありといひける夕顏棚の下にも、瞋恚と、嫉妬と、怨恨とは免かれざる命數にあらすや。矧んや、堂々たる國家と國家の相對待して反目圓滑ならざるも豈に理ならずや。試みに思へ現時の文明は歐洲にありと云へど、寧ぞ知らむ。現時の文明は、殺人器械競争の文化ならんとは。知らず、文明とは果えて、「クルップ」砲、「アームスツロング」砲、さては軍艦、魚形水雷の裡に潜める者なるか。歐洲の天地は、識者既に識認せる如く、「風雨欲來風滿樓」の光景にして、時來らば、何時疾風怒號するかを知る可らず。且つや、東洋の危機、暗遷默移、愈々切迫するに於て、識者夙に國家主義を唱へて、南端北極、打て國民を一九にせんとする者、蓋國家百年の大計と稱

せざる可らず。之かはあれど、こは果して、眞正の國家主義を了解て然るや。排外攘夷、是其基とし、保守的の反動の大勢を維持せんとして、利用する者に非るか。且つ、例令眞正の——然り余輩は敢て眞正と云ふ——眞正の國家主義なる者も、果して天下に絶對的價值を有する者なりや。天下の事物は皆盡く、國家主義の爲めに、叩頭百拜、屈從服屬せざる可らざる程に万能力を附與すべき價值ありや。余輩は實に疑なき能はず。現時國家主義の唱導者か、事物盡く國家主義を鼓吹せんとて、文學をも是か奴隸とて、屈服せよめ、恬然是を利用せんとする者あるを看れば、彼等は果して、國家主義は完全無欠、金科玉條、絶對的價值ありと思へるにやあらむ。豈に痛嘆に堪ゆべけんや。

夫れ、文學は常に絶對的基礎に特立す。莽々とて時代に由て變し、時代に由りて推移せらるゝ者に非ず。享々として、千秋万古其操を變せず、國家未だ成立せざる以前より、連綿不絶、人間天與の靈性の上に基礎を成す。靈性とは何ぞや。天地を貫き、万物に遍滿せる「ヒュマニチー」即ち是なり。與已定めなく、變態極りなき國家の上に建てる國家主義というで、同一に論すべき者ならん。夫れ既に「ヒュマニチー」の上に特立せり。於是乎。其目的や、雄大なり。高尚なり。無限なり。不朽なり。世界全國の人類に限なく美の觀念を附與せんとするにあり。その佛たり、英たり。獨たり、魯たるを論せず。眼底人類及「ヒュマニチー」あるのみ。豈に現實、無常の社會の如き、同家の如き、自我の如き、一小局裡を望まんや。文學固より、社會、國家の觀念なきに非ず。然れども、文學は一社會、一國家の爲めに、宇宙の全人類を放棄すること能はざるものなり。公道は文學の進路なり。眞理は文學の武器なり。私情の爲め、國論の爲め、眞理を曲げ、軌路を變ずること能はざるなり「ヒュマニチー」や。唯に文學の目的なるのみならず。國家終極の目的も此上に存せざる可らず。文學は即ちこの道の光を、闡明啓發し、次て人

間を利導せんとするものなり。然るに、恠むべきは國家主義を唱へて、文學をも、其大混沌(CHAOS)中に蹴込せんとする輩なり。知らず。是文學の神聖を無視する者ならざるか。非乎。

國家主義の現時に必用なるは、余輩固より異論なし。余輩は敢て茲に、國家主義の是非を云はんとするにあらず。しかばあれど、我國現時の國家主義論者よ。余輩は特に足下等の注意を請はざる可らず。曰く、國家主義は決して絶對的價值を有する者ならざることを。只是時勢の產物なり。是決して社會千古の生命を有するものにあらず。天下無限の生命——文學の據れる生命に比すれば、あはれや、是唯一時の方便に過ぎざる生命なり。時幸にして、是を唱導するの用あればこそ勢も存すれ。永遠不朽の原則にはあらず。かの國家主義の張本人、獨乙政法學者、ブルンチュリーすら尙ほ曰へり。

然れども、國民的精神は政治的發達の最極限にはあらず。「ヒュマチー」の發達は必然的條件として、唯に人民の自由なる發現と、競争とのみならず、必ず一步を進めて、一層高尚なる一致の結合とならんことを要す。天理は人民の或特別の性に基かずして、人類本來の性狀に基けり。文明國民の發達せる法律は、國民的習慣に依らずして、人類の交通の必要上に定めざる可らず。一國の根本的立法は他國民に於ても相等しうるべし。故に最極限の理想的國家は「ヒュマチー」の上基せる者なり。(Die Hoechste Stadien ist menschlich) (武氏、國家論英譯百頁參考)

と。武氏の意固より理想的國家を曰へり。直に國家はこの理想と符合する者ならざる可らずとは曰はず。且つ、武氏は未だ國家主義と云はずして、國民的精神と云へり。然れども、こは一の表裏とも云ふべく、國民的精神は、やがて、國家主義の基礎即ち其裏面にして、國家主義は、その精神の表面即ち發現に非ずや。夫れ、獨乙は、國家主義の化石なり。國家主義の影響は、人民、軍隊、學生は論せず。家屋、

公園、會社、其他農具裝飾、日用品、さては犬たり、猫たり、盡く國家主義の記章を帶びざるはなし。武氏其人の如きは、實に、此大氣中の典型にして、國家主義の頑老狸に非ずや。彼にまて尙ほ此言あり。國家主義の價值も、九重雲深き處にもあらず、やがて、時勢と共に變更するものたるを知るべき。然るに此頃如何なる風の吹き廻はしにや、國家主義唱導者の行爲の怪訝に堪へざるは果して何ぞや。彼等は國家主義を、宇宙主宰の惟一神の如く思惟せり。主義と云ふ主義の、最高等なるかの如く迷想せり。國家主義の大袋中には、何者をも籠絡すべき者たるか如く忘想せり。無限と云ひ、絶對といひ、盡く國家主義の專有物なりと誤想せり。昔は武藏辨慶は七道具を持せりと云へど、現時の國家主義者の具備せんとする武器は果して幾何ぞや。この武器の中には、あはれや、文學をも利用し、器械とし、人形視え、國家主義の幕下に据置せんとす。是果して、文學の根本、目的を認識して然る乎。此の如くにして、文學の進歩發達を庶ふも、豈に徒勞に非ずや。而も、彼れ現時の國家主義は、元來一種の攘夷論のこ。排外説のこ。元來歐洲に國家主義の起りぞ、所以は、個人主義の弊害を矯正せんとするに萌せり。何ぞ、世界主義に對する偏見的國家主義ならんや。頑固保守は國家主義の眞想なりとするは、蓋曲解迷信の甚しき者ならずや。夫れ然り。眞正の國家主義を以てさへ、尙ほ文學を汚穢するに、矧んや、此般の俗論輩の藥籠中に文學を愚弄せんとするに至りては、余輩何ぞ是を唾棄排斥せざるを得んや。

何をか俗論輩の愚弄と云ふ、曰く、國民文學の大聲疾呼即ち是なり。余輩は、佛國「アルセイユ」の曲か、その人心困憊倦怠せるを、鼓舞鞭撻え、獨乙祖國歌か、該國の四分五裂を、一致結合せしめたるに大功ありしを知らずんばあらず。然れども、現時の所謂國民文學の眞意果して如何。彼等は果して、現

今國家主義の大勢を利用し、國民文學の假面の下に、一種の保守的、排外的、攘夷的、文學を作為せんとする者ならずや。彼等の主張する言葉や宜し。知らず。是果して、文學を狹量偏頗の坩堝中に投せんとする者ならず乎。非乎。余輩は決して國民文學の語を排斥する者に非ず。國家互に特立對待す。文學も亦自他國民と同一徹に習はず、聳然特立、巍々乎として、天を摩するの文學を大成し、此源頭に發して、世界文學の大潮流に灌注する者とならざる可らず。故に、國民文學は、やがて、世界文學と一致するものならざる可らず。何ぞ、孤然友なく、隱者然として自他を排斥するを以て其任となすべけんや。余輩は又信ず。佛の「マルセイユ」の曲、獨乙「祖國歌」の如きは國民を鼓舞するに大切なるが如きも、寧ど是れ文學の能事終れりとなすべけんや。文學の大抱負より觀察すれば、蓋、些々たる未技に過ぎず。文學の飛翔すべき天地は、國家以外、國民以外、廣大無邊の處にあるを知らずや。文學の目的は更に雄大高偉、無限絶對なるを知らずや。況んや。現時の國民文學を唱ふる者は、一種の保守的文學なるに以てをや。かの大を以て、この小に格せんとす愚も亦甚しい哉。

嗚呼、文學や。宇宙最高理想の寵兒なり。こは或は現實論者の眼中には、迂活濛昧の妄想兒とや見む。悲い哉。今日主義の鉄柵中に彷徨ひ、現金主義の虛榮に眩惑し、「理想」も「觀念」もなきものや。や。や。や。現實論者の輩は、人生問題に對て、如何なる感想をか有する。人生は「理想」なく、定則なく、飄々々々、輕氣球の風に追はれ、草葉の露やかて果なく消ゆる如き者とや見けむ。夫れ、人生徒爾にまて生じ、無爲にして消滅すべき者にあらす。万物各々目的あり。理想する處あり。滔々數千載の歴史の潮流は、必ず一定の目的に向はざるはなし。万里の長風、遇然にきて起り、蓬々行く處を知らざるとは異なるなり。文學は即ち、人心か、此最極限の理想に到達せんとする、心底自然の絶叫にきて、また其最極

の理想に達するを極限の目的とするものならずや。然るを、この高尚の天地より引落して、現實的の國家主義、而も一層狹隘の國家主義に銜せんとす。誰れか、此に對して憤懣せざる者ぞ。

余輩は嘗て、六の觀音の御籤（元錢六枚を錯雜せしめ、是を表裏して排置え、其の表裏の様に依りて運を決する者なり）なる者を試みしことあり。曰く、汝の事業は圓形の器に、方形の蓋を入れんとするか如し。蓋、無理なり。と余輩此論を草えて、大方の士君子に呈するは、或は不合理なる議論なるべし。然れども、現時の國家主義者、文學を其主義に投入せんとするは、豈に此般の類ならずや。文學の特質根本を削除切斷するに非ずんば、如何にして之を合格せんとするか。例令此を抑壓填充せしめたりとするも、此般の文學果えて世に幾何の價值ありや。余輩は實に、現時の狹量的國家主義を排斥攻撃せざるを得ざるなり。是實に、日本將來の文學の一大禍害なればなり。時事に感じて、此文を草す、讀者幸に、書生の暴論となすこと勿れ。

（明治廿八年九月稿）

雜 錄

羽柴秀吉書翰

攝津國梅林寺藏

講師 武藤虎太

只今の殿迄打入候之處御狀披見申候今日成次第ぬま迄通申候古左へも同前候

自是可申と存刻預示快然候仍只今京より罷下候者慥申候上様并殿様何も無御別儀御きりぬけなされ候ぞ、この崎へ御のきなされ候内に福平左三